

ザ・シチズンズ・カレッジ 共催講座

7月13日 銀座フェニックスプラザ

見えない「壁」がわかると世の中が見える

講師 ● 養老孟司
解剖学者
東京大学名誉教授

無意識に目を向けると人生が好転していく！ 脳と心の関係を探る

■ あったことはしょうがないでしょ

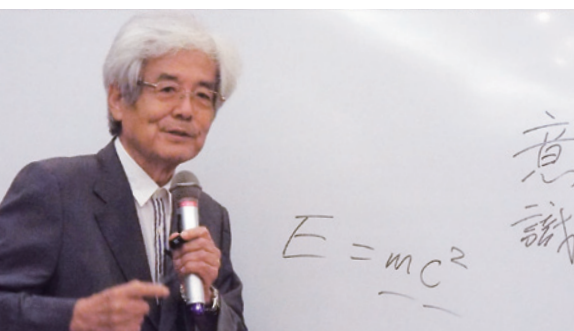
生涯学習開発財団が共催する、NPO法人ザ・シチズンズ・カレッジの第113期第5回講座が、7月13日、東京の銀座フェニックスプラザにて開催された。

養老孟司先生は、医学者としての実績と同時に、2003年に刊行され430万部を超える大ベストセラー『バカの壁』ほか、人間関係の謎を紐解いてくれる著述家としても大変人気がある。今回も200名以上の受講者で満席となった。ちなみに冒頭で先生が近年の壁の例としてあげたのは、「テロは許されない」「津波で何万人も死ぬようなことがあってはならない」といった発言。「そんなこと言ったってあったものはしょうがないでしょ」というのが先生の受け止め方で、自分と違う価値観や不快なこと、興味のないことを理解しようとし、ない姿勢を壁に例えている。

■ 五感と行動の間にある「意識」

この日は人間の「意識」のメカニズムを通して、見えない「壁」ができる理由とそれを攻略するヒントを学んだ。

意識を失うとか、意識があるという言い方をすると、人間の意識とはなんだろう。脳が眠っているときは意識がない。夢を見



ている時間は脳皮質が起きているそうだが、明確に意識があるとは思えない。意識が目覚めているのに体が眠ったまま動かないのが金しばりで、幽体離脱もその延長だそう。優秀なサッカー選手は、プレーする自分とは別に、上空からフィールド全体を見ている感覚があるという。

人間は視覚、聴覚、触覚など五感で情報を入力し、脳を通して、筋肉の動きとして出力される。言葉を発するのも目を動かすのも筋肉の動きだ。その入力と出力の間に見えるのが意識だと考えられる。

■ 「同じ」を認識できるのが人間

動物も眠るのだから意識はあるはずだ。魚も眠る。先生が「よくわかってないから面白い」と研究する昆虫も、どうやら眠るらしい。しかし、動物と人間の意識には絶対的な差がある。それは何か？

先生の飼った猫・まるは、言葉がわかるわけではないが「まる」と呼ぶ相手の声を聞き分けている。猫の鳴き声を聞き分けられる人間は少ないが、猫はすべて絶対音感を持ち聞き分ける。犬の嗅覚は人間の1万倍と言われる。動物ごとに得意分野は異なるが、「違い」を感知する能力が人間に比べ断然高い。たとえばリンゴを見たとき、

動物は1個1個のリンゴを違うものとして区別するが、人間はひとくくりにして「リンゴ」と認識する。

「同じ」を認識するのは人間の能力でもある。講演会場のように知らない人がたくさんいても、同じような人間だからと安心していられるが、猫なら飛んで逃げるだろう。言語も発達した。「青」という文字を見ても、「あお」という音を聞いても、我々は青い色を共通認識として持てる。一方動物は感覚的なので「青」は黒だ。黒なら青だ。人間の子供は3歳くらいになって、自分を他人と同じ立場に置いて推論できるようになると一気に知能が発達する。また、人間が等価という概念を持ったことで物々交換が始まり、貨幣経済に発展した。

■ 人はすべて同じという錯覚

しかし、人はすべて同じと思うのは錯覚で、そこに「壁」が生まれる。一神教の価値観を持つ人々と違って、日本人は、物事はすべて無常であることを知っているはずだ。「行く川の流れば絶えずして……」や「祇園精舎の鐘の声……」である。人間の体を構成する分子でさえ7年で100%入れ替わるとか。スマホで伝達可能なものがすべてではない。ニュースはすでに過去のこと、一寸先は闇と知るべし。

意識はその人の主体性そのものだが、本人から見れば、意識がないときは死んでいられるのも同然。死んでも本人は何も困らない。「では何のために生きているのか？ 人のため、世のためでしょ！」